日本のリア王

ノンフィクション作家
大沢（おおさわ） 周子（ちかこ）

長い年月、終末期のがん患者の思いを聴き取る作業を続けてきた。延命のための手術、抗がん剤治療を終えて、痛み、苦しみを和らげる緩和治療を受けている人びとだ。

厚生労働省発表の人口動態統計によると、死因の一位はがん、日本人の三人に一人はがんで死ぬ時代になった。

自分が遠くないある日、死んでゆくことを受容している人は、微笑みながら言う。

「治るのは希望、治らないのは絶望、というのはこの世の論理だよ。自分はいま生きていることに絶対の価値を置く世界から別の世界に移り住んだのだ」

このようにして〈幸福な最期〉を迎える人々の一方に、老いの受難の風景が視野に入ってくる。

一人の男性の事例を報告したい。

梶谷省吾（83歳）＝仮名＝の妻は、ある日突然、くも膜下出血で死んだ。娘夫婦がやって来て同居をすすめた。

「お父さん一人では寂しいでしょう。この家を売ってマンションを買いませんか。いっしょに住みましょう」

家を売った金を頭金にしてマンションを購入、同居生活が始まった。

楽しき団欒の季節は束の間のことであった。娘夫婦に気を遣い、やがて梶谷は息をひそめて暮らすようになる。

「自由に呼吸ができる、これは人間が生きてゆくうえで根源的希求です。不動産屋を当たりました。80歳を過ぎた人に部屋は貸せない、と断られた。住宅供給公社の高齢者賃貸住宅の空室抽選を待っているところです。とりあえずウィークリーマンションに住んでいます。人生の終着駅近くで、日本のリア王になりました」

娘夫婦に背かれた彼は「日本のリア王」であった。シェークスピアのブリテン国のリヤ王は、嵐吹きすさぶ荒野を咆哮しつつ彷徨うが、梶谷省吾は荒野に座して目を閉じている。

怒りや憤りからはるかに隔たったところに、すでに彼はいる。死に堕ちてゆく途上にいる人間として、緩やかにたどり着いた地点が「赦し」であった。「許す」と書くより「赦す」という文字のほうが彼の心情を正確に表現していると思う。

天命を知って、いい意味での諦めの境地に達している。安心立命の境地と言おうか。阿弥陀とともに、か、イエスとともにか。宗教に近くいるのだ。

中国古典の『荘子（そうじ）』に次の言葉がある。「親を忘るるは易く、親をして我を忘れしむるは難し」。子どもが親を思う情よりは、親が子を思う情のほうがはるかに深い。二千数百年前の名言は私たちにとって諌めであり、また慰めでもある。

血縁が「厄介」と感じる介護を、専門的なトレーニングを受けた介護スタッフは「厄介はスタッフにとってはやり甲斐です」と言いきった。

施設入居を「かわいそうに」という世間のまなざしにも問題がある。次世代と同居が善、という思い込みにも問題がある。

一人暮らしで自立して生きている人、介護が必要になって訪問ヘルパーに助けられて平安な心で生きている人。自分の老いの日々を自分で選んでおきたい。体力と、判断力のあるうちに。

（昭和33年文学部卒。著書に『ホスピスで迎える死』など）